

教育経済建設常任委員会行政視察報告書

末 吉 利 啓

○長野県松本市

「街なみ環境整備事業」及び「歩いてみたい城下町整備事業」について

【所 見】

松本市は国宝松本城を中心として形成された城下町で、毎年多くの観光客を集めている。しかしながら、明治期に大きな火災が3度あり、江戸時代の建物がほとんど残っていなかったり、近年の開発でエリアごとの地域性が失われたりしている現状があった。そんな松本の街なみを整備し、多くの人たちが歩きたくなる城下町を目指し「歩いてみたい城下町整備事業」が開始された。



大きな特徴は城下5地区をそれぞれ個性的に演出し、「東の次は中央に行こう」と次々に各エリアを回ってみたいくなる仕掛けが存在することである。蔵の街なみが特徴的な「中町」、大正ロマン溢れる「お城下町」など整備方針をしっかりとかため、協議会をつくり住民が自主的にまちづくりを進めている。現在も各地の方針に沿って「まちなみ修景事業」の補助で地域性を活かした整備が進んでいる。

街なみ整備は地域住民の方々の理解なしではできない事業だが、松本では各地域でその理解がしっかり得られているように感じた。その背景には、地域の方々や市役所職員の方々の不断の努力があったと思う。整備方針を策定し、協定を結び、地域の自主的なグループからまちづくり推進協議会を設置、そして整備を開始する。この一連の流れを丁寧に各地区で行ってきた賜物なのではないだろうか。それと、住民をまとめる力になったもう一つの要因は「我々は松本城の城下町に住んでいる」という自信と誇りかもしれない。そして実際に多くの観光客が城下町を歩いているのを目の当たりにすれば、何かしなければいけないという気持ちも自然と湧き上がってくるのではないだろうか。

振り返って足利はどうか。鏝阿寺・足利学校をより多くの市民が自信と誇りにつなげ、足利の中心地を多くの観光客が歩き賑わいが生まれることが、住民をまとめる力になるのではないだろうか。そのためには集客とともに、本市が有する

歴史的景観に配慮した、魅力的なまちづくりが必須である。今回の視察を参考に本市の景観形成やまちづくりに反映させていきたい。

○長野県安曇野市

「安曇野市観光振興ビジョン」について

【所見】

北アルプスに囲まれた自然豊かなまち安曇野市には、年間425万人もの観光客が訪れる。そんな安曇野市で策定された「安曇野市観光振興ビジョン」は、既存の「観光地だけの観光」ではなく、安曇野市がもっている財産（暮らしや自然など）全てを観光資源として生かしていこうという「まちじゅう観光」を目指すものである。

平成17年の合併を機に、安曇野がもつ資源を再認識し、それを生かすためのさまざまな組織が活動をはじめた。立教大学特認教授の清水慎一さんを観光振興ビジョン策定委員長として委員会で論議を重ね、平成25年度から同振興ビジョンがスタートした。

従来、観光業者と市民の間の連携は希薄で、「観光地が儲かるだけ」といった、他人事のマインドが市民に生まれがちであった。それを市民や農林漁業などの他産業と結びつけ、まち全体を観光で豊かにする動きは、持続可能な観光振興を進める上で非常に重要であると再認識した。スタート地点となる地域資源を市民が見直す所謂「宝探し」を分野ごとにしっかりと行い、それを「水」「農」「歴史・文化・芸術」の3分野で効果的に活用している。観光をテーマに市民が地域を見つめ直し、まちを豊かにするために連携する一連の流れにより、地域コミュニティ再生の副産物も生まれているようである。

現在本市では、観光と市民の乖離という課題があると考えている。年間約350万人の観光客のうち約100万人はフラワーパークの来場者である。そしてその他といえば鑓阿寺、足利学校というのが王道である。しかし足利にはそれ以外の場所、人、暮らし、文化も十分に観光資源になりうるポテンシャルがあると考えられる。これからの観光振興において、観光がどのような恩恵を与えてくれるのか、どのような意義があるのか、また足利の魅力はどんなものなのかということ共有することが第一歩ではないだろうか。そういった意味で今回の安曇野市の例は観光振興の第一歩、土台をつくる上で大変参考になる事業であった。